

# 池本正純先生のご退職にあたって

宇佐美 嘉弘  
経営学部准教授

池本正純先生のご定年退職にあたり、述べさせていただきます。残念ながら、私の力では、池本先生のご専門である企業家論について学問的な観点から触れることはできません。学生として池本先生から教えていただいた立場、そして教員として池本先生と委員会などで一緒にさせていただいた立場から、池本先生のことを述べさせていただきます。

私が専修大学経営学部の学生として、池本先生にご教授いただいた科目は、1年次の「経済学概論Ⅱ」（必修科目2単位）と3年次の「金融論」（選択科目通年4単位）でした。池本先生に「経済学概論Ⅱ」をご担当いただいたときは、池本先生が専修大学に入職されて8年目になります。私が履修した科目を担当されていた教員の中で、池本先生は最もお若かったと思います。

池本先生の講義は簡潔であったという印象が残っています。当時のノートを見ると、他の科目のノートよりもページ数が少なく、そもそも板書の量が少なかったようです。「経済学概論Ⅱ」での投資の乗数効果を説明する図と「金融論」でのフィッシャーの利子理論を説明する図は、よほど丁寧に解説していただいたのか、今でも記憶しています。「金融論」では、友人と一緒に何度も質問をさせていただきましたが、たとえ分かりきったことの確認のような質問であっても、池本先生は毎回丁寧に解説し直してくださいました。

私が入職してからの2004年（平成16年）から6年間、池本先生は日本商品先物振興協会からの寄附講座として「特殊講義（リスクマネジメント）」をコーディネートされました。テーマは「市場経済におけるリスクマネジメント」で、その冒頭の2回では、私が統計学の立場から市場でのリターンとリスクを説明しました。その後の回も私は出席しましたが、池本先生のわかりやすい解説や、外部講師のお話に対するコメントの的確さは、自分が学生の頃の印象と変わりはありませんでした。

余談ですが、経営学部では1993年（平成5年）にカリキュラム委員会が当時の委員長名で『『冠講座』のひとつの具体化案』という文書を出しています。講座名は「先物市場論 ―国際化時代における日本の市場機構の役割」、後援団体は日本商品取引員協会（現日本商品先物取引協会）でした。授業方法は、経済学特殊講義として開講して、教員がコーディネーターとして加わるというこ

とでしたから、当時の経済学系列に所属していた教員の顔ぶれからは、池本先生が担当されることになっていたのではないかと思います。しかし、当時は、先物取引により多額の損失を被った話が報道で取り上げられたりしたこともあり、教授会としては否定的で、この講座は開講されなかったと記憶しています。

私が書いた「金融論」のノートを見ると、最後のページには、次のメモがあります。

- 1-(A) マネーサプライを変動させる要因
- (B) 貨幣需要を2つに分けて説明
- 2-(A) 貨幣数量説の復興についてヴィクセルの果たした役割
- (B) 財政投融资について マネタリストとケインズ主義
- (C) 貨幣の役割

おそらく学年末試験の問題で、1と2それぞれから1つ選んで論述することを求められたのでしょう。私は答案に自信が無かったので、良い成績をいただいたことについては、相当高い下駄を履かせていただいたのではないかと考えたことを覚えています。

私は入職後もしくは池本先生のご専門は金融であると思っていました。残念なのは、池本先生から企業家論についてお話を伺う機会がなかったことです。関係することを講義でお話されたのかもしれませんが、私の不明のせいかノートを読み返しても、私にはその点は分かりませんでした。

学部生の立場として講義以外で池本先生のお人柄に触れる機会はありませんでした。大学院に進学して、私と同期の藤田幸敏君（現愛知学泉大学教授）が池本ゼミの出身であったため、ゼミ合宿での池本先生のご様子を聞いて、学生からとても慕われていることが分かりました。

入職して初めて委員会で一緒にさせていただいたのは、1997年（平成9年）の新入生キャンプ検討委員会です。学部内部で一緒にした唯一の委員会かもしれません。経営学部として入学したばかりの学生を連れての1泊合宿を行うことを検討する委員会です。結果として、新入生キャンプは実現できませんでした。教授会で導入が可決された案件が、後にひっくり返るという事態を忘れてはいけないと思い、いずれまた合宿を検討する時が来るかもしれないと考えて、関連する書類はこれまで大切に保存してきました。当時、池本先生が教授会に出された文書を読むと、筋が通らない結果に対する悔しい思いが伝わって参ります。

次に一緒にさせていただいたのは2002年（平成14年）から2年間、私が学生部委員になった時です。当時、池本先生は学生部長であり、日本私立大学連盟の連盟学生委員を務めておられました。私が課外担当の次長であったので、他大学の動向を知った方が良いということで、日本私立大学連盟が主催する学生支援研究会議と一緒に参加しました。この時の経験は、私にとって、正課・課外の枠にとらわれずに、学生をどのように支援するべきかを考える良いきっかけになりました。

学生部が主催して全学的なイベントとしてベンチャービジネスのコンテストを開催するというお考えをお聞きしたときは、自分のゼミや学部のカリキュラムという枠にとらわれない発想に驚きました。正直に申して、私が最初に思ったのは「なぜ経営学部として実施しないのか」でした。この際に、私は池本先生のご専門が企業家論であることを知りました。

専大ベンチャービジネスコンテストを立ち上げた当時、日本私立大学連盟の会合で立命館アジア太平洋大学学長から「なぜビジネスコンテストを学生部が開催するのか」と尋ねられて、池本先生

は「ビジネスを立ち上げるのは、経済学・経営学・商学系の学生だけではない。文学部の学生が立ち上げて良いではないか」というお考えを話したそうです。学長はその場で携帯電話を取り出して大学に電話を掛けると、学生部長につながせてコンテストを立ち上げる指示を出したとのことでした。また、ベンチャー論の平尾光司・元専修大学経済学部教授は「いろいろな大学がビジネスコンテストを実施している中で、いくつかの大学が特徴的で、頭一つ抜き出ている。専修大学はその中の一校である」とおっしゃっていました。

その後、池本先生はキャリアデザインセンターを立ち上げ、専大ベンチャービジネスコンテストはキャリアデザインセンターに引き継がれます。当時、従来の就職部をキャリアが付く名称に変更しただけの大学が多くありました。就職部との連携が大切な中で、本学では就職部とは独立して、しかも連携は不可能と思えるほどがんじがらめの組織としてキャリアデザインセンターが設置されます。そのような状況でも、池本先生はキャリアデザインセンター長として、他大学と差別化できるものにするために、いろいろ思案されました。

専大ベンチャービジネスコンテストだけでなく、学生部長としての向ヶ丘遊園駅と大学間の100円バスの導入や各種奨学金制度の改革、キャリアデザインセンター長としての課題解決(地域密着)型インターンシップの開講などは、池本先生でなければ実現しなかったと思います。本学の他の者でも実現できたとはとても思えません。

池本先生は「ミッション」という言葉を使われることがあります。自分の考えが反故にされようと、自分のがんじがらめにされようとも、行動しようとする池本先生を見ると、学生のために絶対に実現しなければならないという使命感を持っておられるような感じを受けます。池本先生は「学生に突き上げられて、仕方なく動いている」とおっしゃいますが、池本先生の使命感に基づく行動に賛同して、関係した者も動いているのだと思います。

ある職員から「池本先生の話は簡潔で論理的であるので、会議の録音記録から議事録を作成することが容易である」と聞いたことがあります。教授会での池本先生の話をついても、論理的で、時に議論の決着をつけてしまうような鋭さを感じることがあります。池本先生が学部長選挙では僅差で敗れてしまったのは、池本先生に賛同する教員よりも、切れ味鋭い意見によって議論に敗れた教員が多かったからではないかと推察しています。

学生のために使命感を持って行動し、学内に賛同してくれる教職員がいて、学外にも幅広い人脈を持つ池本先生が学部長に就いていれば、学部どころか大学も大きく変わったのではないかと思います。そして、定年という制度によって、池本先生が築いてこられた学内外のネットワークが失われるとしたら、専修大学にとって大きな損失となると危惧しています。

池本先生がご退職されると、経営学部には私が学生として講義で教えていただいた教員はどなたもおられなくなります。教員の間の単なる敬称としての「先生」ではなく、学生時代に教えを受けた者としての気持ちを込めて「先生」とお呼びできる方がおられなくなることを、なによりも寂しく思います。

前出の藤田君と小西範幸君(現青山学院大学会計プロフェッション研究科教授・研究科長)と、池本先生の奥様も一緒に池本先生の還暦のお祝いをさせていただいたことは、忘れることができません。池本先生に頼ってばかりでうるさい我々と、ご退職後も末永くお付き合いいただくことをお願いいたします。そして、常日頃から小西君が言っている「経済学、会計学、経営学、統計学を

宇佐美嘉弘

融合した研究」の成果を，世に出せるように努めたいと思います。